亜矢　令和7年4月度特別作品

「春の訪れ」　亜矢

私は先日、チェンバロを学ぶ学生の発表会へ行ってきました。九名が多少緊張した面持ちで、バロック期の曲を演奏しました。聴きにきていた人は少なかったですが、若々しい演奏に、終わった後爽やかな気持ちになりました。普段、学生の世代の人と関わることがないので、私にとってよい刺激になりました。

大学へ春川に沿ひ歩きたる

先生が受付に立つ春日かな

誰も居ぬホールへ入る春の服

早春や文字びっしりのプログラム

チェンバロの屋根は全開春めける

如月や黒のドレスの裾揺れて

楽譜持ち礼の学生フリージア

先生の花束抱へあたたかや

春時雨コンサート果て橋渡る

鴉鳩雀も飛んで春の川

《作品鑑賞》　松田裕子

どの句も春の訪れに心が浮き立っている様子がうかがえます。

寒かった冬が終わり、誰しも、意欲が湧き、活動的になるものです。音楽に精通している亜矢さんにとってコンサートを待ち望んでいた様子が、どの句からも感じられました。

大学へ春川に沿ひ歩きたる

待ちに待ったコンサートが開催されたのでしょう。長かった冬が終わり音楽の大好きな作者の弾む気持ちが、春川に沿ふという言葉に集約されています。気持ちのいい句ですね。

誰も居ぬホールへ入る春の服

早々とホールに入る作者の高揚した気持ちがよくわかります。パステルカラーであろう春服も高揚感をよく表しています。

誰も居ぬの表現が上手いですね。

チェンバロの屋根は全開春めける

チェンバロの楽器がどんなものか知りませんがきっと美しい音色なのでしょうね。全開という言葉が作者の心を上手く表していると思います。

春時雨コンサート果て橋渡る

コンサートの余韻を楽しみながらゆっくりと歩いているのでしょう。ほてった頬に、少し冷たい雨は心地よく感じるのです。春時雨の取り合わせが上手いですね。